

「上級コースにおける教師と学習者の学習目標の共有と教師の内省」

国際交流基金ソウル日本文化センター客員講師

大田祥江

キーワード：CEFRのCan-do、学習目標の共有、自己評価チェックリスト、振り返りシート、教師の内省

1. 背景と目的

1.1 ソウル日本文化センター一般日本語講座概要

1977年にソウル日本大使館広報文化院において、一般成人を対象にした日本語講座として開講されたが、2002年にソウルの中心部に国際交流基金ソウル日本文化センター（以下、ソウルセンター）が開設され、同講座もソウル日本大使館広報文化院から移管された。2004年後期より日本語能力試験1級合格を受講条件にオンラインによる登録制とし、技能別のコース編成に改編した。毎年、2期制を採り、1期の授業回数は全20回（週2回10週）である。また1回の授業時間は100分である。今期は夕方と夜の各コースで5科目8コースを開講しており、受講生は各コース20名定員である。受講生の年齢は、20代が半数近くを占め、30代、40代と続く。また学習目的は、「日本語力向上」が半数程度にのぼり、ついで「日本語力維持」「趣味」「仕事のため」が15%程度ずつとなっている。学習履歴では、韓国の大学での学習歴が半数近く、ついで韓国の語学学校、日本の日本語学校と続く。

ソウルセンターは、国際交流基金の海外事務所が提供している日本語講座の中で唯一、日本語能力試験1級合格レベルの上級者を対象とした講座を開設していることや、多様な日本語使用場面を背景にした様々な学習者が在籍していることなどを理由に、JFスタンダードの検証対象となった。

1.2 「対話技術1」科目概要

発表者が担当する「対話技術1」では、「話す」ことを中心に、場面に合った会話ができる、伝えたいことをわかりやすく伝えることができる、自分の口頭能力レベルを確認し、弱点や課題を把握することを目標とし、ディスカッションやインタビューなどの受講生同士の活動やスピーチの他、日本語ネイティブを招いたインタビューなどの授業活動を取り入れている。10代後半から60代まで幅広い年齢層と一緒に学んでいるが、開講している時間帯（午後4時～5時40分）の関係上、会社員は少なく、主婦、大学生・大学院生、定年退職者が多いのが特徴である。尚、JFスタンダードの取り組みが行われた第1期（2008年後期（9月～12月）講座）の受講生は20名、第2期（2009年前期（3月～5月）講座）は16名、第3期（2009年後期（9月～11月）講座）は14名であった。

1.3 「対話技術」の課題

発表者は JF 日本語教育スタンダード（以下、JF スタンダード）が導入された 2008 年後期講座より「対話技術 1」を担当することになったため、JF スタンダード導入以前の対話技術全体における課題については前任者のレジュメや「対話技術 2」の担当講師との対話から判断した。その結果、JF スタンダード導入以前の「対話技術」では、以下のような課題があったことが分かった。

- (1) 各科目の目標は、受講生の科目選択の便宜を図るために事前にインターネット上で公開されているが、非常に大まかであり、具体的な科目の内容や目標とするレベルが明確ではなかった。
- (2) 全員日本語能力試験 1 級合格者とはいえ、かろうじて合格したレベルの受講生もいれば、大学・大学院で専門的に日本語学を学んでいる受講生、長年日本に滞在した経験を持つ受講生もあり、受講生によって口頭能力のレベルは一定では無く、講座が目標とするレベルの設定が曖昧であった。
- (3) 上級学習者は、限られた授業の時間以外の日本語でコミュニケーションをする機会を自律的な学習の場として、さらに自分の日本語能力を伸ばす力も必要であるが、講座の授業でそのような自律的な学びを支援する取り組みは意識的にはしていなかった。

1.4 本発表の目的

上記の課題を受けて、JF スタンダードの試行の中で「対話技術」の目標の明確化をめざした。そこでは、CEFR の枠組みを利用し、教授活動と適合した目標記述を設定した。本発表では、3 期にわたって取り組んだ、上級者を対象とした 1 科目「対話技術」での教師と学習者の間の目標記述の共有の See-Plan-Do-See の過程を期ごとに報告する。そして、その過程における担当講師の内省をもとにその成果と課題を確認する。

2. JF スタンダード試行の取り組み

JF スタンダード試行の中で、CEFR の Can-do による能力記述文（以下、CEFR の Can-do）を利用し、従来の科目の目標を見直した。また、その目標を受講生と共有し、受講生の学習管理能力の向上をめざし、自己評価チェックリスト（以下、チェックリスト）と学習の成果物を収集・記録するポートフォリオを取り入れた。チェックリストとは、受講生自身が自己評価によって学習結果を内省し、自分の学習過程を管理するためのツールである。（次ページ図 1）

2.1 学習目標の設定

まず、CEFR の共通参照レベルに基づき、学習者が目標とするレベルを B2・C1 と判断した。約 500 ある CEFR の Can-do の内、関連するカテゴリーやレベルのものを利用して、「対話技術 2」の担当者と共に担当コースの目標記述を検討した。その後「対話技術 1」「対話技術 2」に分かれてそれぞれ目標記述の加筆、修正、削除を行い科目の目標記述を決定した。目標設定の際、「対話技術」のこれまでの授業で行ってきた教室活動をイメー

自己評価チェックリスト

よくできる:4/できる:3/あまりできない:2/できない:1

	日本語	韓国語	項目	開始時	中間	終了時	教師 チェック欄
1	個人的に重要な出来事や経験を中心に、関連事項を説明し、根拠を示して自分の意見をはっきりと説明し、主張できる。	개인적으로 중요한 사건이나 경험을 중심으로 관련사항을 설명하고 근거를 제시하여 자신의 의견을 확실하게 설명하고 주장할 수 있다.	説明、根拠述べ、主張	3	3	3	
2	相手の反応や意見、推論に対応して、それに対してコメントや推論を述べて、議論を進展させることができる。	상대방의 반응이나 의견, 추론에 대응하여 그것에 대해서 코멘트나 추론을 서술하고 논의를 발전시킬 수 있다.	相手の反応を受け、議論を進展させられる	3	2	3	
3	あいづちをうまく使える。	맞장구를 능숙하게 칠 수 있다.	あいづち	3	4	4	
4	はっきりとした、自然な発音やイントネーションを身につけている。	확실하고 자연스러운 발음과 억양을 익힌다.	発音	2	3	3	
5	その場の状況や、聞き手に応じて、内容、話し方を調節することができる、その場の状況にふさわしい丁寧さの言葉遣いができる。	그 장소의 상황과 듣는 사람에 맞춰 내용이나 말투를 조절하여 상황에 적합한 정도의 공손한 말씨를 사용할 수 있다.	場面に応じた話し方、言葉遣い	2	2	2	☆
6	適切な語彙が思い浮かばないときに、別の語彙で言い換えたり、間接的な表現で説明することができる。	적절한 어휘가 떠오르지 않았을 때, 다른 어휘로 바꿔 말하거나 간접적인 표현으로 설명할 수 있다.	言い換え	3	3	3	
7	インタビューをなめらかに効果的に行うことができる。興味深い返答を取り上げ、用意した質問を変えるなどしながら、さらに興味深い答えを引き出すことができる。	인터뷰를 매끄럽고 효과적으로 할 수 있다. 흥미로운 답변이 있으면 채택하여, 준비한 질문을 바꾸는 등 보다 더 흥미로운 답변을 이끌어내도록 할 수 있다.	効果的に話す	3	3	3	

図1 自己評価チェックリスト

ジシ、それに関連した CEFR の Can-do を選定した。第1期は15項目、第2期は7項目、第3期は6項目を目標として設定した。さらに、学習者との目標共有を促進するため「今日の目標」という、より具体的な目標記述も作成した。

2.2 ポートフォリオの作成

上記の目標記述を利用し、受講者用のチェックリストを作成した。科目の目標として選定した CEFR の Can-do に若干の加筆・修正・削除を加えて利用した。記述は抽象的であったが、韓国語訳を付した。また、チェックリストとともに学習の成果物を一緒にファイリングするポートフォリオを作成した。ポートフォリオ用のバインダーをセンターで準備し、自己評価チェックリストおよび成果物を入れ、ソウルセンターに保管し、受講生は授業の際に利用することとした。チェックリストは、コース開始時・中盤・コース終了時の3回、受講生に4段階で自己評価するように指導した。また、学習の成果物については、受講生が自分で判断して成果だと思ったものを自由に入れるよう、講座の初日に指導を行った。

3. 各期の具体的な取り組み

第1期から第3期にかけて、基本的には毎回同じ授業活動を行っている。以下、各期の取り組みについて受講生との学習目標の共有を図る取り組みと受講生の学習管理を促進する取り組みを中心に述べる。

3.1 第1期(2008年後期:9月~12月)

3.1.1 取り組みの概要

教師と学習者の目標共有のために、コース中3回の自己評価とは別に、当初はその日の授業に関連していると思われる項目を教師があらかじめチェックリストの中から選択しておき、授業の冒頭に皆でその目標記述を読んで意識するよう受講生に促した。しかし、ただ広げて眺めることにあまり意義が感じられなかったこと、チェック自体に時間が割かれたことなどから、講座序盤に数回行ったのみで、継続しては行わなかった。その後、代わ

りに、毎回の授業で、「今日の目標」という、より具体的な目標（例、自分を印象付ける話し方をする。詳しくものの描写をする。など）を2から3項目ずつ設定し、毎回の配布物の冒頭に掲げるようにした。これは、チェックリストのCEFRの抽象的なCan-doに基づく目標を提示するよりも、毎回の授業に即した具体的な目標を示す方が受講生にとってわかりやすいと考えたためである。ただし、これによりチェックリストに掲げた学習目標と実際の授業内容のずれが生じていたことに後で気づいた。

成果物の保存については、初回の授業で受講生自身で判断して保存するよう指示したが、実際に成果物を入れた受講生は中盤になるまで一人もいなかった。これは、「対話技術」という授業の性格上、目に見える成果物（作文など）が出にくいことなどに原因があると思われる。そのため、授業内の発表時に他の受講生および講師からの発表の評価・感想を書いたシートやレポート数点を入れるよう、講座の中盤に講師が指示した。

3.1.2 第1期の成果と課題

講座開始前に「対話技術2」の担当者と共に目標設定をし、講座の目標や方向性の確認を行ったのは、授業活動を決める上で役に立った。また、「今日の目標」の項目を作り、毎回の授業の中で具体的な目標を提示して指導したことは、受講生にとってその日の授業の内容や目標を明確に把握する機会になったと思われる。講座終了時に行ったチェックリストに関する受講生アンケートでは、「授業に参加する目標が明確になった」「自身の発展をみることでよかった」という肯定的な反応も見られたが、一方で「もっと簡単なほうがチェックしやすいと思う」「私の目標と差が大きいの」などのコメントも挙がった。今後、どのように学習者の自己評価（内省）へ繋げていくかについては、依然課題として残った。

講座最終日にポートフォリオを見ながら「今学期学んだこと、苦手であると気付いた点、今後の目標」などをグループで話し合わせた。クラス全体で成果や課題を共有することができた。他者と共有するという点で、ポートフォリオは有意義なものであると感じた。

3.2 第2期（2009年前期：3月～5月）

3.2.1 取り組みの概要

この期も前学期同様、学習目標の共有は、チェックリスト以外は、授業で使用するハンドアウトの冒頭に掲げた「今日の目標」を表示することで行った。

第1期では、目標の設定とその共有に焦点をあてたことから、第2期ではポートフォリオを授業活動と結びつける試みを行った。そこで、JFスタンダードが理念として掲げている「異文化理解」をテーマに、日本語ネイティブゲストを招いたインタビュー授業を行うことにした。日本語・韓国語両方の膨大な資料を準備してきた受講生も多く見られたことから、これは受講生にとっても興味深いテーマであったことがわかる。受講生には、このような資料を全て成果物として保存するよう提案した。このような保存した成果物について、「対話技術1」のコース修了後、他の科目を受講した際に再度活用できることをアドバイスしたところ、大半の受講生がささいなメモなどもポートフォリオに入れていた。

最終的に受講生がポートフォリオに保存したものは、以下の通りである。

- ・ 授業内の発表時に他の受講生および講師が発表の評価・感想を書いたプリント

- ・日本語ネイティブゲスト授業時（2回）のインタビュー振り返りレポート
- ・2回目のネイティブゲスト授業に際し、各受講者が捉える「異文化理解」に関する事前レポート
- ・最終授業における今学期のまとめシート
- ・（受講生によっては）その他、ネイティブゲストの授業にあたって事前準備したもの

3.2.2 第2期の成果と課題

ポートフォリオをほとんど活用できなかった第1期と比べ、講師、受講生とも積極的にポートフォリオを活用し、そのことが授業内容の充実につながった。ポートフォリオの存在が授業そのものの内容に良い変化をもたらすこととなった。これにより、受講生が授業を主体的な学習の一環と意識し、そこでの記録を保存し活用しようと考えたとも考えられる。課題としては、第2期も引き続きチェックリストの目標記述と「今日の目標」についての関連性が明確に示せていなかったことが挙げられる。受講生が両者をどの程度関連付けているかも確認できなかった。両者の関係性をより明らかにし、講師と学習者の間で学習目標の共有を効果的に行うことが課題として残った。

3.3 第3期（2009年後期：9月～11月）

3.3.1 取り組みの概要

第1期、第2期を通じて、チェックリストの目標記述とは別に「今日の目標」を設定して受講生と学習目標の共有を図ったが、第1期、第2期では目標記述と「今日の目標」の関連性が明確でない部分があったと述べた。そこで第3期では、両者をより関連付けて記述することにより、学期を通じて一貫性のある学習目標の共有を図ることに重点を置いた。学期開始前に目標記述を授業活動の関連性の観点で見直し、より関連のある項目を選定した上で、「今日の目標」の中に目標記述の項目を毎回2項目以上取り入れた。図2は、第1期から第3期のそれぞれ全20回の授業のうち4回目に行った日本語ネイティブゲストを招いた授業における「今日の目標」の記述の変化を示したものである。第1期、第2期と第3期を比べると、記述がより具体的な活動と結びついていることがわかる。

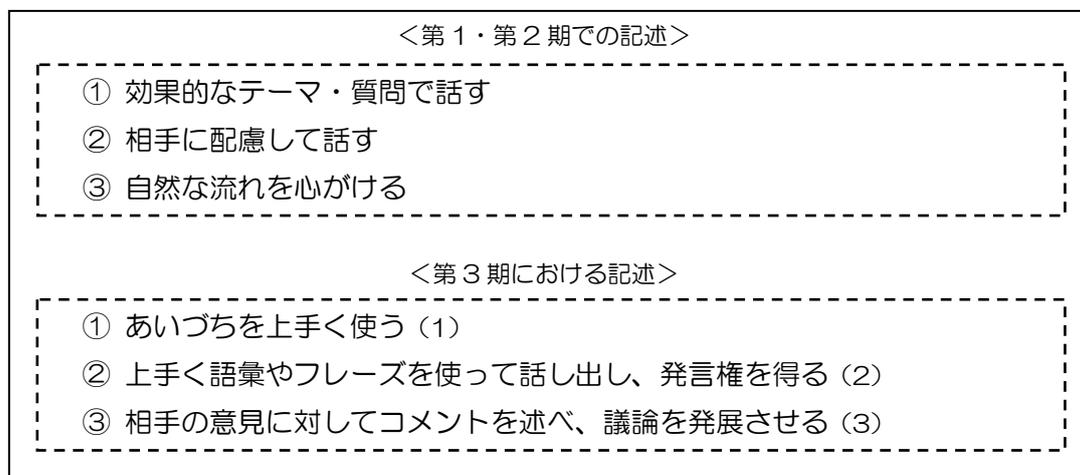


図2 第1期・第2期と第3期での「今日の目標」記述の変化

さらに、第3期の記述は、チェックリストの目標記述との連関を重視した。図2の(1)(2)(3)は、表1の1~3の目標記述と対応している。具体的な授業活動と連動しており、受講生にイメージしやすい「今日の目標」が、抽象的ではあるがより様々な場面での言語行動と結びつく目標記述と連携しているのである。第3期には、授業の冒頭で「今日の目標」をクラス全体で確認する際に、「今日の目標」が目標記述と対応していることを伝え、意識をしながら学習するよう促した。

	コミュニケーション活動	カテゴリー	目標記述
1	相互行為活動：口頭のやりとり	インタビューをすること/受けること	あいづちをうまく使い、議論をなめらかに発展させることができる。
2	やり取りの方略	発言権の取得・保持	発言権を得るために、または考える時間を稼いで自分の発言権を保持するために、手持ちの談話機能表現の中から、適当なものを選んで、話し出しの文句を述べるができる。
3	やり取りの方略	協力	相手の反応や意見、推論に対応して、それに対してコメントや推論を述べて、議論を発展させることができる。

表1 第3期の目標記述（抜粋）

受講生の自己評価（内省）をより促すため、第3期より「振り返りシート」を導入した。受講生は毎回の授業の最後に図3の振り返りシートにコメントを記入し、講師に提出する。講師はコメントを記入した上、次の授業で受講生にシートを返却する。コメントを記入する都合上、シートはソウルセンターに保管し、講座の最後にポートフォリオのファイルに入れる予定である。

4月11日	①今回の授業で気をつけて学習した点	②新しく学んだ単語・文法など
	議論を発展させる話の要点を折衷する 発話 流暢 はつわ りゆたう	
	③講師への質問や要望など	講師より
	まろ ほんとに たのしかったです もっと じぶんに たのむ ために がんばりまわ	とてもポジティブな雰囲気 上手にできていたと思います!

図3 振り返りシート（授業1回分）

振り返りシートには、①今回の授業で気をつけて学習した点、②新しく学んだ語彙（単語）・文法など、③講師への質問や要望など、④講師より、の4つの欄を設けた。①の欄には、「今日の目標」の中から受講生がその回の授業で特に気を付けて取り組んだ項目を1つ選んで記入するようにした。

3.3.2 第3期の成果と課題

第3期では、チェックリストを生かした「今日の目標」の再設定を行い、実際の授業の内容と講座の目標を明確に関連付けて提示できるようになったことが最大の成果である。また、「振り返りシート」に関しては、講座中盤に行った受講生アンケートでは、半数以上が「書く時に一度は考えるようになりますので、少しはやりがいがあると思います」「も

う一度考えてみる機会になりますから、明確にしたいと思います」「いつも意識しているわけではないですが、後で勉強したのを思い出すには役立つと思います」といった肯定的な反応を示した。「振り返りシート」を導入することにより、受講生に学習目標を意識させることが可能になった。さらに、講師側も受講生の細かな問題点や日本語のレベルをチェックすることもできた。授業内容に関する要望を率直にコメントする受講生もいるため、これらを参考にした授業内容の改善も可能であろう。

4. 結果と考察

JF スタンダード試行において CEFR の Can-do を、学習目標の設定及び共有のために利用したことが「対話技術」の課題の解決に結びついたかに関し、成果と課題から考察する。

4.1 成果

4.1.1 学習目標の設定

これまで各科目が講座全体の中でどのような位置づけで目標を設定するかは明確ではなかった。また受講生は日本語能力試験 1 級合格ではあるが、実際の運用能力は技能によって差があった。今回、CEFR の Can-do を活用することにより、技能を重視した学習目標の設定と、「上級レベル」という非常にあいまいな説明のしかたから、CEFR の細かな Can-do を参照することで、受講生のレベルや授業で目指すべき目標を改めて教師が確認し、他の教師と共有することができた。

4.1.2 学習者との授業目標の共有

チェックリストは教師と学習者の授業目標の共有に有益なツールであることがわかった。CEFR の Can-do は一般化されたレベル記述として、客観的に目標レベルを把握するためには有効である。しかし、抽象的で長い記述も多く、第1期は、内容の解釈が難しく具体的な活動と結びつけるのが困難であった。また、CEFR の Can-do に加筆・修正・削除を加えることで元のレベルが変わってしまうのではないかと心配になり、思うように分かりやすい記述にすることができなかった。受講生には韓国語訳も同時に提示したが、母語である韓国語で読んでも理解しきれない受講生がいるのではないかと不安もあった。そのため、第2期以降は「今日の目標」を提示することで、CEFR の Can-do に基づく学習目標を補足し、受講生と講師が共有しやすくなったと考える。

4.1.3 ポートフォリオ

第1期では講師も学習者も積極的にポートフォリオを活用していたとは言えなかったが、第2期はポートフォリオと JF スタンダードを意識して「異文化理解」を授業のテーマに取り上げた結果、授業内容の充実につながり、ポートフォリオが授業に良い結果をもたらすこととなった。また、ちょっとしたメモでも破棄せず成果として保管することで、その後の学習意欲につながったり、学習の際の参考にできる可能性が示された。学期末に行った受講生アンケートでも概ね好評で、「プリントを入れてつかうのがべんりでした」「今まで自分が勉強した記録をもつことができますので」などの意見が見られた。ただし第3

期に入り、ポートフォリオとは別に授業用ハンドアウトを整理するためのクリアファイルを配布したことから、受講生の多くはクリアファイルの方をより活用しているように見受けられた。講座の内容や教材の形態などによっては、臨機応変にポートフォリオの活用の仕方を変えてもいいのではないか。

4.2 課題

これまで評価は、スピーチとレポート、参加態度を数値化してセンター側に提出してきた。一般講座であることから、あまり精密な評価は行っていない。今回もチェックリストのほか授業中の振り返りシートによる自己評価が中心であり、授業目標がどの程度達成されたか、受講生が目標としている「日本語力の向上」がどの程度達成されたかをある程度客観的に判断する基準はまだ明確ではない。目標・教授・評価の一貫性をめざしたコースデザインおよび教授実践をどのように行っていくかが、今後の大きな課題の1つである。「対話技術」の学習目標の見直しとともに目標と評価の一貫性も検討したい。

今回のJFスタンダード導入にあたり、ソウルセンターには日本語国際センターからJFスタンダード開発担当講師が数回来韓し、ワークショップを開催するなどのサポートにより、スタンダードの理念や手法を理解し生かすことができた。将来的に、講師向けのワークショップを開く、または講師が自分ひとりでも自らの実践の内省が十分できるようなマニュアルやツールの開発が望まれるだろう。

5. まとめ

発表者自身はスタンダードを取り入れたばかりの第1期は「目標記述を設定する」「ポートフォリオを作る」という「形」に気を取られ、不便さを感じたり上手く使いこなすことができずにいたが、ポートフォリオや目標記述という形はあくまでひとつの方法の提示であり、重要なのはこれらを使用する中で学習者の意欲が高まったり、教師の中で何らかの気づきが起こって授業改善に繋がったりすることであると、第3期に入り強く感じるようになった。今後は更に臨機応変に講座に合った取り入れ方を模索していきたい。

また、CEFRのCan-doを利用して学習目標を作成する過程は、授業内容がクラスの目標に沿っているか、目標自体が適切なものであるかを再確認し、講師が授業の難易度や毎回の授業内容を内省し改善する役に立った。そして、学習目標が受講生と共有されているか、個別面談やインタビューによる方法は本講座では確認が難しいが、チェックリストやレポート、振り返りシートを含むポートフォリオ、アンケート結果などを教師が分析することによって教室活動の振り返りを行うことができた。ポートフォリオは学習者の内省を促すだけでなく、教師の内省を促すツールであると言える。以上、当講座での取り組みが上級者向け日本語教育のモデルの1つとなり、JFスタンダード能力記述文データ検索ウェブサイト（「みんなのCan-doサイト」）の開発や授業設計の参考となることを期待する。

参考文献

国際交流基金（2009）『JF日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金